

2016年8月22日掲載

帯状疱疹と歯痛

歯髄炎と似た症状現れる

帯状^{ほうしん}疱疹は、子供のころにかかった水ぼうそう（水痘）が治った後、水痘ウイルスが^{さんさ}三叉神経や脊髄神経の神経節に潜伏し、それが長い期間を経て、病気やストレス、抵抗力の低下をきっかけに再び活動を始め、神経を伝わって皮膚に症状が現れる疾患です。その際、発疹や激しい痛みを伴うことが知られています。

問題は、三叉神経（目の下、上顎、下顎）に起きた帯状疱疹です。歯に原因がないにもかかわらず、歯髄炎（歯の神経が炎症を起こした状態）と同様の症状が現れます。口の中に水泡が形成されていれば、帯状疱疹を疑うこともできますが、そのような症状がない場合診断はとても困難です。よって、待機的診断（経過観察など）とするなど、慎重な判断が必要とされます。

通常、この強い痛みが出た翌日くらいに、顔面に帯状疱疹の発疹が現れます。帯状疱疹の出現で、歯の治療の継続が困難になり、中断を余儀なくされることもしばしばあります。初期の段階なら、抗ウイルス剤の服用が効果的ですが、激しい痛みが出た段階では、効き目がないこともあります。

前述の通り、歯に原因がなくとも歯髄炎と同様の痛みが出るのが一般的ですが、帯状疱疹と同時に、痛んでもおかしくない歯に痛みが出ている場合もあるので、その場合、帯状疱疹の治療後に継続的な歯の治療は必要です。

帯状疱疹の予防には、疲れやストレスをためないことなど、健康に留意し規則正しい生活を心掛けましょう。